

出エジプト記8章21-23節 「区別して救う神」

1A 御民の区別

1B エジプトの災いにて

2B 過ぎ去る裁き

2A 神の主権による定め

1B 人の行いによらない恵み

2B 差別なき救い

3A 区別される方

1B 創造において

2B 着物による表象

3B 救い

4A 世の高ぶり

1B 秩序への挑戦

2B 憐れみによる受け入れ

3B 恵みによる輝き

5A 患難からの救い

1B 患難から救われるイスラエル

2B 患難を免れる教会

本文

出エジプト記 8 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回で 7 章まで来ました。今日は午後に、8-9 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、8 章 21-23 節に注目します。「²¹もしもわたしの民を去らせないなら、わたしは、あなたと、あなたの家臣と民、そしてあなたの家々にアブの群れを送る。エジプトの家々も、彼らのいる地面も、アブの群れで満ちる。²²わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシエンの地を特別に扱い、そこにはアブの群れがないようにする。こうしてあなたは、わたしがその地のただ中であって主であることを知る。²³わたしは、わたしの民をあなたの民と区別して、贖いをする。明日、このしるしが起こる。』」今朝のキーワードは、「区別」です。主は、人々を区別されて、救い、贖いを行われるということを見ていきます。

1A 御民の区別

1B エジプトの災いにて

主が、エジプトに対して災いを下しています。私たちが前回見たのは、ナイル川を血にすることです。そして午後に見るのが、蛙が大量にナイル川から出て来ることです。そして、土地の塵がブヨになります。これが、初めの三つの災いです。そして第二ラウンドが始まります。それが、ブヨの災

い、家畜に対する疫病、そして、腫瘍の災いです。その第二ラウンドの始まりにおいて、イスラエルの民は区別して、災いは下さないと宣言しておられるのが、今、読んだ箇所です。

この区別して救われる働きが、続きます。次の家畜に対する疫病について、イスラエル人の牛や羊は、何一つ害を受けません。9 章です。「³ 見よ、主の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上により、非常に重い疫病が起こる。⁴しかし、主はイスラエルの家畜とエジプトの家畜を区別するので、イスラエルの子らの家畜は一頭も死なない。』」

そして第三ラウンドの始まりは、雹です。「²⁵ 雹はエジプト全土にわたって、人から家畜に至るまで、野にいるすべてのものを打った。またその雹は、あらゆる野の草も打った。野の木もことごとく打ち砕いた。²⁶ ただ、イスラエルの子らが住むゴシェンの地には、雹は降らなかった。」それから、いなごの災いがある、三日間、真っ暗闇となる災いが下りました。ところが、です。10 章、「²³ 人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかった。しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。」

そして最後の災いは、エジプトの長子たち、また家畜の初子が打たれるというものです。ところが、イスラエルの子らには、全くの平穏が保たれます。「11:5-7 エジプトの地の長子は、王座に着いているファラオの長子から、ひき臼のうしろにいる女奴隷の長子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。⁶そして、エジプト全土にわたって大きな叫びが起こる。このようなことは、かつてなく、また二度とない。』⁷しかし、イスラエルの子らに対しては、犬でさえ、人だけでなく家畜にも、だれに対してもうなりはしません。こうして主がエジプトとイスラエルを区別されることを、あなたがたは知るようになります。」

2B 過ぎ去る裁き

このように、イスラエル人をエジプトから区別することによって、救われます。本来、すべての人が災いを受けて、何もおかしくありません。けれども、主が敢えて区別して、その災いが過ぎ越すようにして下さるのです。

2A 神の主権による定め

ここに、神の定めによる救いがあります。

1B 人の行いによらない恵み

イスラエルの子らが、何か良いことをしたから、神が救うことを決められたのではなく、あくまでも、神が選ばれて、アブラハムに与えられた契約を思い起こして、それでイスラエルを救われるのです。人の行いによらない、神の恵みによって救われます。ヤコブが選ばれた時のことを思い出してください。ロマ 9 章から読みます。「ロマ 9:11-12 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わ

ないうちに、選びによる神のご計画が、12 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。」まだ母リベカの胎にいる時に、すでにヤコブを愛し、エサウは退けるように決めておられました。

2B 差別なき救い

ここまで聞くと、「神はえこひいきをするのか？」と思われるかもしれません。いいえ、神が区別をされるとするのは、差別していることではありません。主は差別されることは決してありません。「すべての人」ということが、強調されています。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」

信じるすべての人、であります。どんな人であっても、主の前に出る時には、拒まれることはありません。先週、パウロがアテネで宣教をした場面、使徒 17 章を平日の学びで学びました。そこで、信仰を持った人で、二人の名前が出てきます。「17:34 ある人々は彼につき従い、信仰に入った。その中には、アレオパゴスの裁判官ディオヌシオ、ダマリスという名の女の人、そのほかの人たちもいた。」とあります。ダマリスは女性です。ギリシアは男性社会であり、女性が混じっているということは、もしかしたら、愛人や娼婦みたいな人だったかもしれません。そういった女性が信仰に入り、また裁判官が信仰に入っているのです。すべての人に、福音が開かれているということが、よくわかる記事です。

ですから、神は差別されることはありません。しかし、そこで「信仰に入る」という共通の行為があります。つまり、世界にいるすべての人に、福音にある神の救いが与えられています。けれども、信仰によって受け入れている人々こそが、その救いを自分のものにできるということです。受け取っているか、受け取っていないかの違いです。

3A 区別される方

1B 創造において

私たちは、区別する神を信じています。区別とは、言い換えれば秩序です。「創 1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた。」というところに、主が、「光、あれ」と言われ、光ができました。そして、「神は光と闇を分けられた」とあります。そうやって、分けていき、植物も、「種類ごとに地の上に芽生えさせよ」と命じられました。動物も同じです。そうして、人も造られましたが、その人のわきから女を造られました。「男と女に彼らを創造された」とあります。

2B 着物による表象

そして、神は区別される方であることを、目に見える形で示すために、イスラエルに次のような、興味深い律法をくださいました。「申 22:9-11 ぶどう畑に二種類の種を蒔いてはならない。あなた

が蒔いた種と、ぶどう畑の収穫全体とが、聖なるものとして取り分けられてしまうことのないように。10 牛とろばとを組にして耕してはならない。11 羊毛と亜麻糸を混ぜて織った衣服を着てはならない。」これはとても興味深いですね。特に最後に、羊毛と亜麻糸を混ぜて織った衣服を着てはならない、とあります。ここには、主が分けている区別を、混ぜ合わせてはいけないということを、象徴的に示しているのではないかと思います。

3B 救い

そして、主は救いにおいて、区別をされるのです。永遠のいのちを得る者と、永遠の滅びに至る人と、どちらかになります。二つの道しかありません。「申 30:19 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」いのちか死、祝福かのろいという二つの選択肢なのです。

「私は 70%クリスチャンで、30%、クリスチャンではない」ということはないのです！クリスチャンか、クリスチャンでないかの、どちらかでしかありません。グレッグ・ローリーという伝道者がアメリカにいます。彼が高校生の時に、元ヒッピーだった伝道者から、「あなたがたは、イエスの敵か、イエスの味方かのどちらかしかない」という言葉が心に刺さりました。イエスに対して自分は中立だと思っていたが、中立ということは、敵対していることなのだと理解したのです。

4A 世の高ぶり

1B 秩序への挑戦

しかし、人は、神の秩序に対して挑みかかります。それは、神が主権者であり、神が定めたことに対して、「なぜ、私たちに主権がないのか？我々が自分の定めを決めるのだ」とします。すべてのことは、自分の意志で決められるのだとします。人は、神のかたちに造られていますから、自由意志を持つ存在です。けれども、それは主権者である神に敬い、従っている中で与えられている自由意志であり、その主権者の決めることに文句を言うことは、単純に、高ぶりです。

2B 憐れみによる受け入れ

しかし、いわゆる区別しても、それに合わない人たちがいます。男と女の違いと言っても、自分の性に違和感を抱く人もいます。親を敬わないと言われても、ひどい目に合わせられた人がいます。けれども、男と女の違いについては、生物学的にどちらかだということもありますが、神がそのように造られたのです。親についても、今の親から他の親に移すことはできません。

そして、ここからが大事です。「秩序というのは、例外があるからこそ秩序である」ということです。秩序というのは大まかな枠組みです。細部を見るならば、それに必ずしも合致しないように見えない人々がいるのは、当然なのです。そこに、主は憐れみを示されます。聖書は、神が、言われている秩序から外れているような人々に、憐れみの御手を差し伸ばしておられます。主は、病の人々

のところに行って、触れられました。らい病、あるいはツアラアトは、汚れているとされて、人々から離れて生きなければいけないと律法にあります。しかし、ツアラアトに冒された人が群衆の中で近づいて、イエスに触れたら、清められました。区別はあっても、主はそれから離れているような人々に、憐れみの御手を差し伸べるのです。

3B 恵みによる輝き

そして、そのどうしようもないような定めにある中で、なおのこと主は恵みを注いでくださいます。自分が弱い時に、強いのだとパウロは言いましたが、それは、自分の弱さに、キリストの恵みが完全に働くからです。自分が不利だと思われていたことが、実は、主のご目的があることがあります。

以前、お話ししましたが、ハワイのサーファーが、片腕が喰われてしまいました。その後で、努力して、試合でチャンピオンになることができました。ずっと年月が経って、今は母親ですが、「もう一度、両腕で生まれて来られるのだったら、そうしたいですか？」と尋ねられたら、「いいえ、片腕になったことによって、どれだけ多くの人を励ますように、神さまに用いられたかしのれない。」という言い方をしているのです。

こうした、神の主権にある恵みがあります。それを、自分の力によって、自分の意志によって移ろうとすると、そこには無理があるところか、秩序に挑みかかることになります。究極の葛藤、フラストレーションを自分に抱え込みます。そして、終わりの日には、惑わしの霊が働いています。反キリストが、天におられる神に冒瀆を吐くようになり、それに多くの人が加わりますが、すべてを自分で決めることができ、神の定めさえも変えることができると考えるのは、まさに反キリストのすることなのです。悪魔的です。

ですから、神の選びにある恵みに留まるべきです。イスラエルの人々は、ただゴシェンに地にいるということで、災いに遭いません。長子が打たれる災いについては、息子が家において、そして家族の者が、子羊の屠った時の血を、鴨居と門柱に塗るだけでよいのです。そこにいることが、災いから救われる道なのです。キリストのうちにある救いの中にあるかどうか問題であり、自分が何をしたかではないのです。

5A 患難からの救い

1B 患難から救われるイスラエル

イスラエルが、主によって、エジプトでの災いから守られたことを考えましょう。彼らは、その災難の中にあっても、主が守ってくださいました。これは、イスラエルの救いについての神の方法になります。彼らは、患難の中から救い出されます。

イザヤは、こう預言しました。「43:2 あなたが水の中を過ぎるときも、わたしは、あなたとともにい

る。川を渡るときも、あなたは押し流されず、火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。」そして、終わりの日、患難に投げ入れられるが、最後には救われることとを、エレミヤを通して語られます。「30:7 わざわいだ。実にその日は大いなる日、比べようもない日。それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」

2B 患難を免れる教会

そして、主は教会に対しては、この患難、神から来る御怒りについては、そこを通らずして救い出される約束をされています。「ガラ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」

悪の時代と言えば、ロトの時のソドムがありますね。ロトは、その未婚の娘たちと共に、ソドムを出てから、ようやく主は火を降らせて、滅ぼしました。それで使徒ペテロは、こう言います。「Ⅱペテ 2:7-9 そして、不道德な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、ロトを救い出されました。8 この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。9 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」

主は、このようにして、ご自分の救いに入れられた者たちを、御怒りから救われます。「ロマ 5:9-10 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。」キリストの流された血によって義と認められます。御怒りが来ても、そこから救われます。イスラエルの民はその中であって守られますが、今は、教会は御怒りそのものから、天に引き上げられることによって守られるのです。

みなさんは、どちらにいますか？キリストのうちですか？それとも、まだ外にいますか？どちらかだけです。